

嬉し「がらふもの」

岡田蝶花形

研究といふのは自分の我を通す事ではない。悪いと思つたら私はいつでも自説をひつ込めるに吝でない、それが研究であらふと思ふ。第七劇評集で私が御所三の考察で「嬉しがらふもの」と語る人はないといつた事に對し武智氏からそれは古鞆太夫も語るし「嬉しからふもの」よりも正しいと教へられたが、その時は多くの太夫に尋ねていづれも「嬉しからふ」がいゝといふものだから（こんな場合大抵の人は古くからの言ひ傳へをよいとする先入感があるのでいふのに過ぎない）飽迄私は「からふもの」がよいと押し通したが、最近に「がる」は接尾語の一

つであつて他語に接して動詞となすものである。そしてそれには「ト思ふ」などの意がある、それがつくると自動詞で四段活用をなすとハツキリ分つてこれなる哉と奇麗サツパリと武智氏及び古鞆太夫に肯をぬいだ。以後私は「うれしがらふもの」といふつもりである、判つた以上それが何で「嬉しからふもの」といへよう。若それをいへるとすれば同じやうに接尾語で名詞について自動四段活用となる「利口ぶる」がある。それを入れてやつてごらんさい「利口ぶらふもの」などゝやると人に笑はれる事になる。それと丁度同じ事であると心得れば宜敷い。